

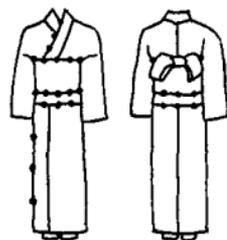
滋賀女短大 ○奥村 董

京女大家政 福井弥生 林 仁美

目的 和服は平面構成の技法によって作られたものを、立体の体型に適合するようにタックなどを適宜によせて着装する。そのため着装技術が必要とされ、また動作することにより着装上の着くずれがおこる。そこで本研究では、和服着用時の動作による着くずれについて検討するために、単衣長着を用いて実験を行ない、さらにずれの部位について考察を行なうために上下分離した二部式の和服との比較をした。

方法 被験者は成人女子二名とし、資料の実験着は一部式・二部式和服ともに、綿100%の金巾を用いて被験者の体格に合わせて縫製した。基本動作は、①両上肢前挙・側挙・水平交差②両上肢上挙③前屈④正座⑤椅座、以上各10回、⑥歩行五分間⑦階段昇降二往復の七動作である。測定部位は、図のように前面・後面に設定し、一部式和服の着くずれを設定した基点からの布のずれとして測定した。その結果より帯上下およびお端折り周辺に部位をしぼって、二部式和服との比較をおこなった。

結果 着くずれしやすい部位は、上肢動作時では腋窩部、下半身動作時には、後面のお端折りおよび上前衿下部が顕著であった。また上肢水平交差よりも上挙の方が、さらに階段昇降よりも歩行による着くずれの方が大であった。一部式と二部式和服の比較では、前屈および座位姿勢における後面のお端折り部位の着くずれ量が、一部式和服でやや大きい結果となった。すなわち、一部式と二部式の形態の相違が、着くずれの相違として表れたといえる。



測定部位